

一間の広縁一輪の時鳥草

守

【自句自解】

藤村旧居の仲秋の庭に開け放たれた「字形の広縁は、一間幅の広々としたものであった。受付兼見守り役の方がいなければ、歩き疲れた足を投げ出し、大の字に寝転がりたい誘惑に駆られるほどのものであった。マンションという名の鉄筋コンクリート・アパートメントハウスや小洒落た造りのプレハブハウスを見慣れた眼には、伝統的な日本家屋の提示する空間美の素晴らしさには、改めて感動するばかりであった。この私にとって垂涎的である広縁には、文机の上の一本の時鳥草だけがその存在を許されていた。

一種の様式美とも言えるこの景観を表すために、「一間の・・・一本の・・・」という数詞を並べ、これに名詞を連結しただけの極めて簡明な句立てを試みた。

藤村の愛でし閑居や小鳥来る

友子

【秀句鑑賞】

島崎藤村は私的にも公的にも波乱万丈の履歴を重ねた。浪漫派詩人として颯爽と登場し、後に自然主義文学に転じ、日本近代文学史上に大きな足跡を残した。血の呪いとも言うべき個人的な懊悩の果てに、藤村が晩年を静かに過ごした小さな日本家屋が、主なきまま秋景の中にたたずんでいる。

このような来歴の藤村旧居であればこそ、「小鳥来る」の季語が効いている。生前この家にどのような客人が来訪し、どのような会話がもたれたのかを知る由もないけれども、小鳥だけは代を変えても毎年、何一つ変わらずに訪れるのである。藤村は、墓を造るほど大磯の地を愛し、この家での静かな生活を愛でたのである。

湘南と呼ばれし海や鰯雲

幸

【秀句鑑賞】

「湘南」の語源は中国湖南省を流れる湘江の南部のことであり、当地は禅宗が盛んであった。日本の湘南は、鎌倉幕府時代の禅宗の流入に伴って呼称が広まったという。これが鎌倉・藤沢中心説(相模川以東)の論拠である。しかし、相模川以西が本来の湘南であるとする論者は、室町時代に小田原に定住した華

僑の子孫である崇雪が自ら創設した鳴立庵に石碑を建て、この石碑に「著盡湘南清絶地」と刻んだことを論拠に挙げている。

このような経緯を知れば、「湘南と呼ばれし・・・」と慨嘆する気持ちも分かる。流れゆく「鯛雲」は時の移ろいによる「湘南」の中心地の移動を象徴しているかのようなのである。その意味では季語が働いている。

大磯の町で目にした大方の自動車のナンバープレートには、「湘南」の文字が表記されていた。

広縁の古式の鍵やほととぎす

幸

#### 【秀句鑑賞】

藤村旧居の広縁に臨んで詠んだ一句であるが、広縁の広さそれ自体を取上げたものではなく、広縁に付いているガラスとの錠前に注目したものである。ガラス戸に装着されている錠前は、今流行の電子ロックやメカニカルロックではなく、その日本家屋が建てられたときから装着されていたと思われるような古色蒼然としたものである。作者はガラス戸を二三度滑らせて、錠前を確かめていた。

この結果得られた言葉が「古式の鍵」である。「古式」と形容することによって当該家屋が建てられてからの長い時間の流れを想起させる。しかも、単に「古い」というのではなく「古式」ということによって、その家屋でなされた様々な人間の営為までが、格式あるかのように見える。

前記した見守り役の女性から注意されながら、俳句の題材に自分の手で直接触れ、錠前の外観構造に子細に見入ったことが句の成功の一因になっている。

波音の高き庵や木の実落つ

友子

#### 【秀句鑑賞】

海岸近くの段丘の端に建てられている鳴立庵の地理的状况と、密生した木々に取り囲まれた鳴立庵の敷地情報が、簡潔に提示された一句である。

波音と木の実の落下音によって、明るい湘南の海に面しながら、垣根のように林立する雑木のもたらず木暗さの中にある鳴立庵が、良く詠まれている。

水落ちて鳴立庵の秋深む

秀一

#### 【秀句鑑賞】

鳴立庵の東斜面下を流れる小さな川に着目して鳴立庵の秋を詠んだものである。周知のように水は高いところから低いところに流れる。そして、明らかに瀧と呼ばれる程のもでなくとも、川底に段差があったり、途中に堰ないし堰に準ずるものがあったりすれば、水はその高低差を落下し、その落下音は周囲に響き伝播する。このせせらぎの音は庵を編み、あるいは庵を訪れて思索に耽る者にとつて通奏低音として共存し、ある場合には庵の一要素として内在化される。

水が落ちることによって秋が呼び込まれ、それが深まっていくかのように、「水落ちて・・・秋深む」と詠まれた世界が抵抗感なく、納得させられるのである。「水落ちて」との措辞が効いている。

十月の点るトンネル少年来

守

#### 【自句自解】

大磯駅を降りて直ぐの真向かいにエリザベス・サンダースホームがあった。入構には事前許可が必要との看板があったが、その雰囲気は惹かれて、問責は覚悟の上で入り込んだ。手前の付属中・小学校の校舎とエリザベス・サンダースホームの寮本体との間は、自然の段丘によって遮断されていた。この防壁とも言える段丘には一本のトンネルが掘られていた。これに入るかどうか逡巡しているとき、トンネルの向こう側に人影が現われた。さては管理者がやって来て注意されるのかと身構えたところ、そうではなかった。トンネルは通行者を検知して自動的に点灯され、確かな靴音とともに現われたのは、寮生の一人の高校生であった。はきはきとした礼儀正しいその高校生の応答振りには、参加者全員が感心させられた。

文責 副代表 増田 守